

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第14回 佐野隆治会長③
大学生の本気を引き出す環境づくり



昭和50年代初頭、外国語の専門学校として国内最大規模の学生数を誇っていた神田外語学院は、大学設立に向かって挑戦を始めました。約10年に及ぶ設立準備の日々には数多くの苦難と運命的な出会いがありました。そして、昭和62（1987）年4月の開学。神田外語大学は、佐野学園の理念を貫きながら、学生のやる気を引き起こす画期的なシステムや施設づくりを続けていきます。大学の設立と運営にかけた思い、そして日本の将来を見据えた英語教育のあり方について佐野隆治会長にお聞きしました。

昭和45（1970）年に神田外語学院の本館を建てて、昭和51（1976）年には3号館を建てました。大勢の学生諸君が来てくれた。学生もたくさんいると、真面目に勉強する子が出てくるじゃないですか。専門学校の2年間じゃおもしろくない。どこかの大学に入ってもっと勉強したいっていう学生が毎年数十人はいたんです。事務長をやっていたからしょっちゅうそんな声を聞いていた。

学院ができた頃は各種学校でしたから、大学に入るなら受験し直さなくちゃならない。昭和51年に専修学校法ができて、専門学校を卒業すれば、法律のうえでは短大を終えたのと同等になるはずだった。でも、どこの大学も編入試験を認めていなかった。何かしなくちゃならない、という気になる。国の決めたことに腹を立ててもしょうがないですよ。じゃあ、自前で大学を創ろうということになったわけです。

親父（初代理事長 佐野公一氏）も、専修学校法ができた頃から念仏のように「大学を創れ、大学を創れ」と言うようになった。そして、ついには、「すぐに土地を探せ」と言い出しました。



でも、なかなかいい土地がなくてね。やっと、昭和53（1978）年になって、千葉の幕張に土地が見つかった。千葉県の企業庁が埋め立てた土地を教育機関にも売り出すって話が入ってきたんです。パンフレットを見たら、そりゃ夢の街ができるようなことが描いてある。それじゃ、ひとつその話に乗ろうと思ったんです。ここなら目指す大学が創れると思いましたね。



ただ、僕らが小さい頃、幕張っていうのは、潮干狩りに行くところでした。少しずつ整備されていることは知っていましたから、親父とおふくる（第2代理事長佐野きく枝氏）と一緒に見に行くことになった。昭和53（1978）年の10月のことです。

現地に行ってみると、アシが生い茂っていて、電車も道路もなんにもなかった。それなのに親父は、「ここに大学を建てる。ここがいい」って言うんですよ。でも、そう言うと「心臓がドキドキする」と胸を押さえて、その場で倒れてしまった。それで近所の病院に行って、1週間ぐらいして東大病院に移って、10月18日に亡くなりました。（1/8）

第14回 佐野隆治会長③
大学生の本気を引き出す環境づくり

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



**インフラ整備が終わってからバブルが弾けた
運ですよ。努力というよりは運ですよ**

ぜひとも幕張に大学を建てないといけなかった。親父の遺言ですからね。すぐに千葉県に申請をしたんですが、なかなか決まらなかった。実は、早稲田大学がその土地にキャンパスを建てるという話があった。だから、早稲田がどうするかを決めるまで待たなくちゃならなかった。県にしてみれば、早稲田に来てほしいですよ。専門学校が大学を創りますなんて話は相手にもしてもらえない。およびじゃなかったわけだ。

結局、早稲田大学は埼玉県の所沢にキャンパスを作ることになった。早稲田の校歌は、「都の西北、早稲田の杜に」とあるし、幕張は都の東ですからね。校歌に反するから幕張をやめたんじゃないかって（笑）。早稲田の計画がなくなり、千葉県もようやくこっちを向いてくれるようになった。土地を買ったのは、昭和58（1983）年でした。

その後、幕張では都市整備が進んで、京葉線が通って、ビル群も建っていきました。でも、その後にバブルが弾けた。タイミングが少し遅れたら、計画全体が変更されていたでしょうね。ギリギリでインフラの整備が間に合った。それにうまく乗れたから、よかったんですよ。運ですよ。努力というより運ですね。



幕張に土地を決めると、みなさんに「なんで、東京の神田外語が幕張に大学を創るんですか」と聞かれた。最初の頃は、将来きれいになるからって説明していましたが、それじゃ説得力がない。親父が亡くなる前に、「千葉には海の港もあるし、成田空港という空の港もある。世界の文化文明は、水辺・港からやって来たものだ。そこに外語大学があるなんて、ぴったりじゃないか」って言っていたのを思い出したんです。そこで、「千葉港、成田空港、文化は海の岸辺から始まる」というフレーズにまとめて、新設する大学の方向性として謳うようになったんです。



でも、外国語大学というだけじゃ、インパクトがないですよ。そんなときに出会ったのが古田暁先生です。当時は講談社で英語の百科事典を編集されながら、「異文化コミュニケーション」の研究もされていた。古田先生の専門は神学で、パチカンで研究もされていたそうです。パチカンには世界中から神父たちが集まってくる。共通語はラテン語だそうです。文化的背景の違う者同士がラテン語で相手を理解しながら、ともに学ぶパチカンは、まさに異文化コミュニケーション研究の発祥の地と言えるでしょうね。

古田先生に出会った当時、異文化コミュニケーションという言葉そのものがほとんど使われていませんでした。古田先生は「私たちは外国語を通じて異文化を理解する。語学の勉強って本来、そのためにあるんじゃないか」とおっしゃった。そして、これからはコミュニケーションの時代だと。知識もとても深い方だったので、ああ、この人だと思った。コミュニケーションの大学を作る。本気で大学が作れる。そう思えたのは古田先生に出会えたからです。大学の土地を購入したのも、古田先生と出会ってからでした。(2/8)

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第14回 佐野隆治会長③
大学生の本気を引き出す環境づくり



**文化コミュニケーションと日本文化の研究
学部名は「国際コミュニケーション学部」に決めた**

神田外語学院が設立してから顧問をしていただいた小川芳男先生にも、「コミュニケーションの大学はいいだろう。単に外語大学を作ってもしょうがない。それなら学長に名を連ねるよ」とおっしゃっていただきました。

古田先生は講談社の辞典の編集をほぼ終えて、次の定職が決まっていなかったから、神田に「異文化コミュニケーション研究所」を作って、その所長になっていただいた。それも運ですね。そして、古田先生は編集者としてもすごい幅広いネットワークをお持ちだったから、一般教育の先生方を集めることができた。新設の大学で、あれだけ興味深い研究をする教授陣を集られるなんて、普通はありえないことでしたね。もし、小川先生にお願いしただけだったら、神田外語大学は、東京外国語大学の出身者に頼りっぱなしの大学になってしまっていたでしょうね。

異文化の理解と同じくらい力を入れようと思ったのが日本文化の教育です。日本人として、日本の文化をきちんと紹介できなくちゃいけない。

学院の事務長をしていた頃、初めての海外の語学研修を企画しました。カナダのバンクーバーの大学です。夏だから、大学にはカナダの学生はいなくて、メキシコの学生が英語を学びに来ている。彼らは物怖じせずに活発に話すんですよ。すると、日本人は無口になる。これは、何かしなくちゃいけないと思いましたよね。



翌年、女の子には盆踊りの浴衣、男の子には柔道着を持たせました。折り紙と書道のイベントをやって、カナダ人の名前を当て字の漢字で書いてあげた。大成功ですよ。仲良くなって、その日のうちに片言でも英語をしゃべる。外国人とコミュニケーションするうえで、文化は強い。そう実感しましたね。そのためには、学生に日本文化の勉強をさせなくちゃいけない。



そんな経験もあったから、大学では語学だけでなく、文化教育にも力を入れようと思ったんですよ。異文化コミュニケーションと日本文化の研究だから、じゃあ、新しい大学の学部名は「国際コミュニケーション学部」にしようと思った。

文部省に通って、「異文化コミュニケーションの大学を創りたい」って何度も説明しました。高等教育局の大学設置室の担当官は理解してくれました。でも、大学の設置を検討する審議会の委員は、学者の方々なんですよ。学者に説明するのは、我々ではなく、大学設置室の担当官です。当時は、異文化コミュニケーションは学会もなかった。結局、「国際コミュニケーション学部というのを取り下げて、外国語学部にしてほしい」と言われたんですよ。小川芳男先生が学長で、外国語学部なら委員からも難しい質問をされずにすむから、と担当官たちは言うんです。結局、外国語学部で申請をすることになりました。(3/8)

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第14回 佐野隆治会長③
大学生の本気を引き出す環境づくり



**真のコミュニケーションをするには
ひとりの人間としての独立心が必要です**

昭和61（1986）年の末に大学設置の許可が下りて、昭和62（1987）年4月には神田外語大学が開学しました。

開学時の建物は、1号館から3号館まで。あとの土地にはアシがぼうぼうと生えていましたよ。1号館のエントランスには、池田弘一先生に「言葉は世界をつなぐ平和の礎」と大きく書いていただいて、それで壁を作った。学院は2年教育ですから言葉を学んで精一杯。大学は4年間だから文化の指導もできる。4年間、ふれずに学び続けるには、建学の理念を明確にしておかないといけない。大学に新しい職員や教員がたくさん入ってきても、考え方がふれないようにするために、大学の事務局にも学院のベテランの職員を送り込んだ。そこをしっかりと握っておかないと、「神田外語」ではなくなってしまいますからね。

大学では、開学してからも文化の教育には力を入れました。その中心となるのが研究所です。異文化コミュニケーション研究所と日本研究所、そして言語学研究所。この三つが大学の柱です。



日本研究所の所長は大学で日本倫理思想史を担当していた窪田高明先生。それと、池田弘一先生。池田先生は、神田外語学院が予備校をしていた昭和30年代から国語の講師をしていただいて、それからずっと日本文化を学生たちに教えてくださっています。池田先生は江戸文化を体現されている方で、小唄端唄が唄えて、落語もできるし、書も書ける。日本文化を研究されている方は多いけど、池田先生のようにご自分の芸能と話で学生を感動させられる方は少ない。文化の教員は、学生に教えるのが仕事だから、いい論文を書いているかなんて関係ないですよ。



開学の3年目にスタートしたのがELI (English Language Institute) 。フランス・ジョンソン先生にお願いしました。ジョンソン先生は自立学習の考え方を提唱されていた。日本人の先生は教えたがるんですよ。学生は真面目に学んで安心する。でも、それじゃあ真の語学力なんて身に付かない。真のコミュニケーションには、ひとりの人間としての独立心が必要です。だから、ジョンソン先生から自立学習の考え方を聞いたときは、これだって思ったし、ELIを定着せるのにできる限り応援した。新しいことをやると風当たりが強い。よほど強く守ってあげないと定着せずに、つぶれちゃいますからね。

ELIを作ったのは、うちの大学にしかないものを作る必要があったからです。昭和30年代に神田外語学院を作ったとき、すでに英会話学校というのはありましたから、そこと戦うには特徴が必要だったんです。だから、外国人教員を採用したり、視聴覚設備に力を入れた。それと同じで、他の大学と戦うために、外国語大学として何か新しいことをやらなくちゃならなかった。ELIはその武器のひとつだったんです。(4/8)

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第14回 佐野隆治会長③
大学生の本気を引き出す環境づくり



**大学を創ろうと思ってから開学まで10年かかった
やっぱり時間がかかったことのほうがこなれている**

ジョンソン先生と話して、ELIの教員には、修士号を持っていて、博士課程を目指している若者たちを採用することにしました。大学生に教えるのだから若いほうがいい。博士課程に入るための研究も応援しています。第二外国語としての英語教授法の研究では世界的な権威であるクリストファー・カンドリン教授やデイヴィッド・ヌーナン教授にコンサルティングをお願いして、両教授から直接、ELI教員の論文指導をしていただきました。それに、研究発表の費用も出しています。きちんと研究をして、なおかつ発表もしているから、ELIを終えてから、博士課程にもずっと入れるのです。

ELIはたった4名の専任講師とジョンソン先生で始めた。でも、少しずつ規模が大きくなり、神田外語大学の大きな特徴となりました。今では、熊本や広島、大阪の大学に英語教育の「大学間教育連携」としてシステムごと導入されています。

神田外語で培った英語教育を外に出していく、という考えはずいぶんと以前から持っていました。昭和40年代から50年代の神田外語学院が伸び盛りだった頃、大手の簿記学校にしても、予備校にしても、全国展開を図り、規模を大きくしていった。「神田外語さんは、なぜ地方校を出さないですか？」とよく聞かれたものでした。でも、自分たちの考える英語教育は違う。人間教育も含めて、神田外語学院で教えられるレベルに教員を育てようとする10年はかかります。人を育てることは難しいですよ。



正直言うと、学院をもっと大きくしたいと思ったこともあります。でも、考えてみると、予備校や簿記学校はスキルを教えて、試験に合格させればいい。人を育てる教育とはちょっと違う。でも、神田外語は人を育てることを目指している。だからは無闇に全国に広げるようなことをしなくてよかった。それをやっていたら、今頃、おかしくなっていたよ。

地方校ではなく、大学を作るという方向に定めて、大学ができてからは、ジョンソン先生のELIができて、これならシステムごと持っていけると思うようになりました。教育連携するパートナーの大学には、「必ず成果を挙げます」と約束する。システムごと売って、でも、学校の運営にはタッチしないんです。だから、成果を挙げることに集中できるのです。

振り返ってみれば、大学を創ろうと思ってから開学まで10年かかった。神田外語学院の本館と3号館ができて、学生がたくさん来てくれて、大学を創る資金ができて、大学も創っちゃえと簡単に考えていた。でも、10年かかった。僕はせっかちだから、思いついたらすぐにやる。すぐやって失敗したこともたくさんある。やっぱり時間がかかったことのほうがこなれている。思いつきだけでできたことは、よくよく考えてみると大したことではないことが多いですよ。もう少し物事は慎重になるべきだと、最近は思うようになりましたね（笑）。（5/8）

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第14回 佐野隆治会長③
大学生の本気を引き出す環境づくり



学生をどうやってやる気にさせるか
新しい施設を作るときはそれだけを考えてきた

平成12（2000）年に「ミレニアムハウス」を建てました。大学には400人が入る大きな教室はあるけど、講堂がなかった。でも、講堂だけを創ってもおもしろくない。日本文化を教える和室と劇場を作ることにした。劇場を作るのには、池田先生と色々な劇場を回りました。先生は、舞台がどれほど大切かを教えてください。特に舞台の奥行きや裏側が広くないと使いづらいという話を聞かせていただきました。建築家はダメです。池田先生のように実際に舞台をおやりになっている方でないと使い勝手が分からない。舞台を使う側が使いやすい劇場。観る人は座っているだけでいいんですから。

6号館ができたのは平成15（2003）年。ELIが発展したSALC（Self-Access Learning Center）とメディアプラザが完成しました。神田外語大学はまだまだ偏差値が高くない。それは学生の学習意欲が低いからです。どうやってやる気にさせるか。新しい施設を作るときはいつもそればかり考えます。学生がやる気になる施設を作っていけば、いつかは優秀な学生が出てきて、偏差値も上がるのかなと思っていますね。

図書館がどうしてもほしいという教員からの要望が多くて7号館を建てました。京都にある平等院の宝物館が小山をくりぬいて作ってしまっただけでいいんですよ。だから地面から屋根がずっと芝生でつながっている。図書館だから明るくなくてはいけないのでガラス張りにした。近代的なところもないとね。



6号館ができると、英語以外の言語の先生たちからは「少数言語の私たちだって少しは優遇してほしい」という声が聞こえてきた。そこで7号館の2階に、7つの語学空間を再現したMULC (Multilingual Communication Center) を作りました。言葉を学ぶ環境だから、偽物じゃ困る。買えるもの、作れるものはすべて現地で調達してほしいと制作会社に依頼した。博物館や美術館の展示を手がけている会社です。



タイ語のエリアには、古来からある休憩所の「サーラー」があるんですが、これは上野動物園のサーラーと同じ設計者なんです。タイの大使館に相談したら、紹介してくれた。ちょうど上野動物園の建物の改築で来日していたから、こちらも引き受けてくれた。タイでは有名な建築家だそうです。これも運がよかった。

僕は学生たちが外国語を話しているのを観ると、よかったなぁと思いますよね。まあ、自分のやってきたことは間違っていなかったんだと、少しだけ安心します。でも、すぐに、本当でこれでよいのだろうか。もっと、何かやることはないのかって考えしまう。ひとつやって、またひとつやって、失敗もして。いろんな欠点も見えてくる。そして、あれもしたい、これもしたいと思う。でも7号館まで作って、とりあえず必要なものはすべて揃った。まだ土地はある。あとは、これからの連中が何をやるか、何を作るかですね。(6/8)

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第14回 佐野隆治会長③
大学生の本気を引き出す環境づくり



**それぞれの学長時代に、それぞれの成果があった
でも、それはなっていたら初めて分かること**

これまで、5人の方々に神田外語大学の学長をお願いしてきました。その
とき、そのとき、大学にとって必要な方をお願いしてきました。

初代の小川芳男先生は東京外国語大学で学長を2期務められた英語教育界
の重鎮です。昭和30年代に神田外語学院を始めた頃から顧問になってい
ただきました。文部省の審議会の委員などもおやりになった方だから、
大学設立のときにはやはり心強い存在でした。語学の専門教育では数多
くの先生方に小川先生の人脈で来ていただきました。残念ながら、開学4
年目の平成2（1990）年にお亡くなりになりました。

後を継いだ2代目の学長は井上和子先生です。井上先生は言語学の研究者
です。大学ですから、研究のレベルを高める必要がある。井上先生が学
長になられて、教員のみなさんがよく研究をされるようになった。井上
先生は、それぞれの教員が文部省からどれくらい科学研究費をとったか
を非常に重要視されていました。科学研究費をとるためにはしっかりと
した論文を書かなくちゃいけないでしょ。そして、大学院言語科学研究
科の修士課程と博士課程を立ち上げていただいたのも井上先生です。



井上先生の後の学長は石井米雄先生です。石井先生は、英語の言語学者ではなく、タイの政治法学の研究者です。タイ語を中心に東南アジアの言語や文化に造詣の深い方でした。専門が言語学ではないから、一般教育の先生方からの支持も高かった。文化教育にも力を入れてくださった。2001年には「国際言語文化学科」が設置され、専攻としてインドネシア語、ヴェトナム語、タイ語、ブラジル・ポルトガル語が学べるようになりました。ただ、急に文部科学省から人間文化研究機構の初代機構長に任命され、急遽、まだ任期が残っていたのに学長を辞めなければならなくなった。



そこで外務省の出身の赤澤正人先生に就任を要請しました。赤澤先生は、世界各国の大使館で参事官や公使、大使などを歴任された方です。大学としても、平成13（2001）年に「国際コミュニケーション学科」を設立して、外交分野での人財づくりに力を入れていました。赤澤先生は、国際関連の教育にとっても力を入れ、とりわけ外務省を目指す学生たちはよく指導していただきました。それと、赤澤先生は東京大学で学んでいるときに、神田外語学院で英語を学んでいたというご縁もあったんです。

そして2010年には酒井邦弥先生が学長となりました。酒井学長は銀行出身。今度は実業界のご出身ですから、経営や運営といった側面から指導していただいています。大学で働く職員たちにとっても刺激になることでしょう。

それぞれの学長時代に、それぞれの成果があった。でも、それはなっただいて初めて分かること。何か目的を持ってお願いしているわけではなく、その時のタイミングで、運よくうちの大学に来ていただいた。学長になっていただいて、「ああ、そういう変化が起きるんだ」と後から分かる。運ですよね。本当に運です。(7/8)

第14回 佐野隆治会長③

大学生の本気を引き出す環境づくり

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



**人と人のつながりは、時間が経つごとに醸成されていく
それはきっと平和な世界を創るはずです**

僕はね、日本人のための語学教育を根本的に作り上げたいんですよ。小学校から英語がカリキュラムに入るようになりました。僕は小学校から高校までを通じた英語教育で、日本人の思考と文化、考え方や芸術をきちっと外国人に説明できる語学教育を作り上げたい。かつて欧米諸国は、植民地支配した人々に英語やフランス語、ドイツ語を教えた。そういった外国語教育ではなく、日本人が日本の文化を本気で伝える英語教育が必要だと考えています。あとどれだけ生きられるかわからないけれど、そういった教育を作り上げることをライフワークにできたらいいかなと思いますね。

神田外語大学には、日本研究所もあれば、語学研究所もある。そして異文化コミュニケーション研究も行っている。そういう研究所が力を合わせれば、日本人のための英語教育ができる。それができれば、小学校から高校までの教科書に神田外語メソッドが反映されるでしょう。それぞれの研究所が教科書を作っていくうえでの重要な研究機関になれば、神田の学生たちは大学の教員にもなれる。おもしろいと思うんですがね。本気になれば、文部科学省が支援してくれなくたって、自力でだってできますよ。



何年も前から言っているけれど、日本の大学は入試制度の根本的な改革が必要だと思います。高校を卒業したら、海外で2年間くらいボランティア活動をさせて、それを大学への入学試験とすればいい。海外でさまざまな経験を積み、言葉で苦労し、現地の人々と交わる。そこから得るものは、単なるボランティア精神でも、キャリアでもない。その2年間で出会った人々は自分の仲間になる。同じ苦労をした仲間が世界にいて、30年後にそれぞれの世界で活躍していれば戦争なんて起きやしませんよ。



アメリカとソ連が対立していた冷戦時代の戦争は分かりやすかった。西か東か、それだけでしょ。でも、最近は違いますよね。小さな紛争が世界のいたるところで起きている。状況が複雑になっているからこそ、言葉と文化を深く学ぶ必要性があるんですよ。

高校3年生が100万人いたとして、1年100万円かかったとして、2年間で総額2兆円。30年後に日本がどれだけ力をつけているかを想像してください。政府は国を守るために武器を買う。どれほど強力な武器を買おうと、武器は買った瞬間から劣化が始まる。でも、人と人のつながりは時間が経つごとに醸成されていく。それはきっと平和な世界を創るはずでしょう。今こそ、「言葉は世界をつなぐ平和の礎」という佐野学園の建学の理念の意味を、もう一度問いかける時だと僕は思います。(8/8)

(次号に続く)

佐野隆治 (さのりゅうじ)

昭和9 (1934) 年東京生まれ。慶應義塾大学法学部中退。昭和38 (1963) 年、神田外語学院の前身であるセントラル米英語学院の経営に参画、以来、神田外語グループの発展において中心的な役割を果たす。昭和63 (1988) 年に学校法人佐野学園の第3代理事長に就任。平成22 (2010) 年、理事長を退き、会長に就任する。平成29 (2017) 年3月永眠。享年82歳。